様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２６ 年　 ６ 月 ２３ 日現在

機関番号：２４４０２
研究種目：若手研究(B)
研究期間：2010～2013
課題番号：２２７２００６３

研究課題名（和文）都市空間と大衆音楽文化の相互作用に関する聴覚文化研究―大阪を中心に

研究課題名（英文）Auditory Cultural Studies on the Interaction of Popular Music Culture and Urban Space - Focusing on Osaka

研究代表者
増田　聡（MASUDA, Satoshi）

大阪市立大学・大学院文学研究科・准教授

研究者番号：５０３２５３０４

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　2,200,000円、（間接経費）　660,000円

研究成果の概要（和文）：聴覚文化論・メディア論・都市論の理論的基盤を踏まえて、都市空間における音文化とデジタル・メディア空間における場所イメージの交錯の様態を把握する理論構築を目指した。特に、メディア空間に媒介された音楽消費の現状、文化的生産物の所有と剽窃をめぐる問題系、録音メディアにおける音楽作品の存在論、災害地と大衆音楽文化の関係などのトピックについて検討が行われた。

研究成果の概要（英文）：Based on the theoretical foundation of auditory culture studies, media studies and urban studies, I aimed at building theory to understand the relevant between image of place in the digital media space and sound culture in urban space.
In particular, it has been discussed several topics, such as the current music consumption that is mediated in media space, issues related to plagiarism and ownership of musical products, the ontology of musical works in the recording media, and the relationship of popular music and disaster areas.

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：芸術学・芸術史・芸術一般

キーワード：大衆芸術

１．研究開始当初の背景

２１世紀に入った音楽研究の動向は大きな変化の渦中にある。かつての音楽学が行ってきた、１９世紀西洋に成立した芸術音楽・作品音楽のあり方をパラダイムに据えるテクスト中心主義的な音楽研究は、傍流とは言わないまでも「人類の音文化の総体」のうち一部分を扱うものに過ぎない、とする認識が急速に一般化した。それにかわって、かつての「主流音楽学」から排除されていたものの、他の人文・社会科学諸分野との相互交流の中で発展してきた研究分野（民族音楽学、音楽社会学、ポピュラー音楽研究、サウンドスケープ研究など）の活動が著しく活性化したことで、互いに前提や方法論を異にする諸研究分野が音楽研究の枠内に併存する状況が生じてきている。いわば、もはや音楽研究は単一のディシプリンではありえず、諸分野のゆるやかな連邦によって構成されるものとなってきている。

さらに、メディア論や比較文学などの分野からの「非音楽学的」な音楽あるいは音文化へのアプローチも盛んとなっており、音楽・音文化研究の多様性の度合いは著しく増すばかりである。このことは研究主題と手法のバリエーションの増大というメリットをもたらす一方、音楽・音文化に関する学術研究諸分野間の接合性と相互理解に少なからぬ問題を生じせしめる事態を招いている。

かような状況の元、分裂した音楽・音文化研究を再び統合し、包括的な視野から再構想しようとする研究動向が、聴覚文化研究（Auditory Culture Studies）という呼称を得て（とりわけ英語圏で）拡大している。そのきっかけとなった Michael Bull, Les Back(eds.), The Auditory Culture Reader, Berg, 2003 が打ち出した視点は、Alain Corbin らの感覚の歴史学、Steven Feld らの音響人類学や、都市の大衆文化研究、Paul Gilroy や Stuart Hall ら文化研究の議論などを包合する。「音」ではなく「聴覚」に、対象ではなくそれを感受する人間の活動の総体に関心を寄せるこの観点は、Jonathan Sterne, The Audible Past,Duke University Press, 2003 や、Mark Katz, Capturing Sound,Univ. of California Pr.,2004 など、同様の観点にたった重要なモノグラフと共に２１世紀の音楽・音文化研究の方向性を示すものとなった。それはつまり、自律的な作品音楽ではなく、人間がその聴覚に与えられる文化との関係のコンテクスト（脈絡）に焦点をあてる研究姿勢であり、高級文化と低級文化の区別を排して、聴覚文化の総体がいかなる歴史的・社会的な重層構造の中に存在しているかを見極めようとするアプローチである。

研究代表者がこれまで行ってきた研究は、ポピュラー音楽研究およびメディア論の観点から音楽美学的な諸問題（作者性、作品概念、ジャンル、空間性、創作過程、受容）を検討する作業であり、特に音楽テクノロジーや音楽著作権などのテーマについて分析を深めてきた。これらの成果はいずれも聴覚文化研究の動向と共通の関心に立つものであり、諸研究分野間の相互接続に配慮しつつ、音楽研究のテーマと方法の拡大について一定の成果を挙げてきた。

２．研究の目的

本研究課題においては、前項で述べた研究背景の延長線上に、音楽と空間に関する問題系を聴覚文化研究の視点から探究するべく、都市と大衆音楽文化との相互関係を主題として提起し、具体的な対象として大阪という都市空間とそこをとりまくメディア表象を取り上げることを目指した。

都市文化論は、ロラン・バルトや前田愛らのテクスト論・記号論的アプローチ、吉見俊哉や北田暁大らによる上演論的・社会動態論的アプローチ、また橋爪紳也らの文化史的アプローチなど、あたかも都市そのものが内包する多層性・複合性と呼応するかのように、テーマや方法論の拡散を露にしている。だがこれら諸研究が、いずれも都市の視覚的要素に傾斜した「視覚文化論」的な力点を持つことは否めない。もっとも、都市に対して聴覚文化研究的なアプローチをとった諸成果に重視すべきものがないわけではない。マリー・シェーファーを嚆矢とする一連のサウンドスケープ論、渡辺裕による音楽文化史としてのウィーン論(『文化史のなかのマーラー』筑摩書房、1990 年)、中川真による京都の歴史的サウンドスケープの考察(『平安京　音の宇宙』平凡社、1992 年)、あるいは Sara Cohen, Rock Culture in Liverpool: Popular Music in the Making (Oxford Univ Pr.,1991)に見られるような具体的な都市空間における音楽実践のフィールドワークなどが影響力のある先行研究として挙げられるだろう。だが、これら先

行研究のいずれにも共通するのが、具体的な都市空間を、現実の音実践あるいは音楽実践が「鳴り響き」を現象させる単層の空間としてのみ捉えるスタンス、換言すれば都市空間における「音空間の実定性」を前提する視点である。それに対し本研究課題は、前述の Sterne らが明らかにしてきた音響技術と身体技法との歴史的・社会的相互構築の過程についての知見を踏まえつつ、音・音楽と都市空間の多層的な相互関係についての理論的認識の更新を目指すものである。

いまや、現実の都市空間の中に存在する音・音楽のあり方は、ライブハウスやコンサートホール、あるいはストリート・ミュージックなどを理念型とするような、実定的な音空間にのみ存在しているわけではない。むしろ、ヘッドホンステレオや携帯電話のような個人向け音響メディアの遍在により、個々の聴取者の身体が現実空間を共有しつつも、個々に異なる聴覚体験を同時に行うような、多層的な空間構造の元に都市の聴覚文化は存立している。「聴覚分割体 auditory dividers」とでも呼ぶべきこれらの携帯音響デバイスは、サウンドスケープ論や都市の音楽実践調査が(暗黙のうちに)前提してきた、都市空間の聴覚体験の単層性を破綻させるように機能していることは明らかだ。マリー・シェーファーのサウンドスケープ論は、このようなメディア媒介的な聴覚体験を「音分裂症」として否定的に概念化するにとどまったのだが、いまや都市空間では音分裂症こそが「自然な」聴覚様式を形作っており、メディア空間と都市空間との多重にねじれた関係についての検討作業は喫緊の課題であるといえる。細川周平『ウォークマンの修辞学』朝日出版社、1981 年や Iain Chambers,Urban Rhythms, Macmillan, 1985 などが嚆矢となり、Michael Bull,Sound Moves: iPod Culture and Urban Experience, Routledge,2007 に至る携帯音楽プレイヤー研究は、都市空間を遊歩する聴取者たちの独特の空間感覚を明らかにしてきた。本研究課題は、この「分裂した音空間」という実態を、さらに大阪という具体的な都市空間との関係の中で検討することを目論む。

単層的な都市−音楽空間から、メディアに媒介された多層的な都市−音楽空間への理論的な移行は、必然的にメディア空間の中での都市空間の表象を問題の俎上に挙げることになるだろう。現実の大阪という都市空間を遊歩する聴取者たちにとって、「大阪」とはメディア空間における視聴覚表象によって形作られたさまざまなイメージに感染したものとして立ち現れる。日本の大衆音楽史において、「大阪」とは固有の表象性に彩られたトポスとして存在し続けてきた。演歌やブルース、ファンクやレゲエなど、「大阪」の都市イメージと強く節合されたジャンルは数多い。村田英雄が（標準語で）歌う「王将」（1961）を iPod で聞きながら、歌の舞台となった通天閣周辺を歩く経験とは、音楽と都市空間それぞれにとって、どのような意味作用をもたらしているのか（それは沖縄民謡を那覇・国際通りの民謡酒場で聞く経験と、何を共有し、何を違えているのか)、ジャマイカ発祥のレゲエの人気が高い大阪南部地区が「日本のレゲエの本場」と称されるとき、都市空間と音楽表象の関係はどのようなメカニズムで繋がることになるのか。大衆音楽が表象してきた大阪の都市空間のイメージの歴史的・間メディア的分析と、多層的な聴覚空間としての現実の大阪の調査分析を統合することで、都市空間と大衆音楽文化の関係についての理論化を押し進め、聴覚文化研究の知見を拡大しつつ新たな音楽研究のあり方を構想してゆくことが、本研究課題の目的であった。

３．研究の方法

(1)メディア空間と分かち難く結びついた都市空間における聴覚文化の調査・分析

メディア空間における音楽受容の実態調査として、インターネット上での音楽配信の現状調査（ヒアリングおよび文献・ネット調査）を行なった。また携帯デジタル音楽機器使用の実態調査（ヒアリングおよび文献・ネット調査）を行なった。また大阪市内の飲食店・商業施設・街頭などを対象としたフィールドワークを随時行ない、公開空間の音環境に関するデータ収集を継続的に行なった。

(2)メディア空間における大衆音楽が、大阪という都市空間のイメージを構築してきた過程についての調査・分析

大衆音楽史の体系的な資料収集を行い、大阪を主題としたポピュラー音楽資料について基礎的なデータベースを構築した。

(3)両者の相互作用を包括的に把握する理

論化作業
　国内外の先端的音楽学（New Musicology、批判的音楽学、音響人類学）の諸研究のサーヴェイを行うとともに、音楽学・芸術学・文化研究などの分野の国内の若手研究者との小規模の研究会合を継続的に開催し、現代的な人文学・文化研究と音楽研究との接合可能性を探った。

４．研究成果

　インターネットなどのメディア空間における音楽の存在論と、現実の都市空間の音環境との相互作用を解明することを目指したが、研究が進行するうちにメディア空間における音楽の存在論に関する理論的問題が浮上し、その解明が主な成果の中心となった。
　研究代表者が以前に発表した録音メディアにおける音楽作品の存在論に関する研究（増田聡『その音楽の〈作者〉とは誰か』みすず書房、2005 をはじめとする諸研究）への批判が 2012 年に発表され（今井晋「ポピュラー音楽の存在論――《トラック》、《楽曲》、《演奏》」 、『ポピュラー音楽研究』Vol.15、2012）、これを受けた理論的更新作業が必要となった。これを学会発表①および②、さらに論文として雑誌論文①に発表した。これらの成果は、本研究課題が基盤を置くメディア空間における音楽存在論を、単に録音物の水準からリマスタリング、同一作者によるリミックスなどのより細分化された事例への適用を可能にする理論化作業であり、本研究課題を遂行する上で基盤的な位置を占めるものである。
　また、メディア空間に媒介された音楽消費の現状を雑誌論文③において整理・検討し、さらにメディア空間における音楽の所有・帰属をめぐる諸問題について、学会発表③および雑誌論文②において公表した。
　付随して、研究期間中に発生した東日本大震災に関連し、現実の地理的空間における災害に、メディア空間で流通する音楽・音文化がどのように働きかけ、また影響を受けるかについて、震災後の日本の大衆音楽実践を行為論的に検討し図書①として刊行した。
　研究計画中に掲げた基礎的な作業に注力したため、研究目的に掲げた「現実の都市空間としての大阪」の音文化の諸相については、資料の収集・整理および調査、基礎的分析にとどまることになった。成果としての公刊は他日を期したい。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計　3 件）

①増田聡「われわれは『存在しないもの』を聴いている――今井晋『ポピュラー音楽の存在論―《トラック》、《楽曲》、《演奏》』への応答」、ポピュラー音楽研究、査読無、Vol.17、2014、pp.31-48

②増田聡「パクリ：ポピュラー音楽の場合」、ポピュラーカルチャー研究、査読無、Vol.4 No.1、2011、 pp.22-32

③増田聡「水に歴史はない」、ユリイカ、査読無、Vol.42 No.10、2010、pp.162-166

〔学会発表〕（計　3 件）

①増田聡「われわれは「存在しないもの」を聴いている　―今井晋「ポピュラー音楽の存在論―《トラック》、《楽曲》、《演奏》」への応答」日本ポピュラー音楽学会第２５回全国大会ワークショップ「ポピュラー音楽の美学と存在論（２）―今井論文をめぐるオープン・ディスカッション」、2013 年 12 月８日、関西学院大学（兵庫県西宮市）

②増田聡「作品概念と真正性―今井論文に応答する」、日本ポピュラー音楽学会第２４回全国大会ワークショップ「ポピュラー音楽の美学と存在論―今井論文をめぐるオープン・ディスカッション」、2012 年 12 月 9 日、武蔵大学（東京都練馬区）

③増田聡「パクリ：ポピュラー音楽の場合」、京都精華大学ポピュラーカルチャー研究プロジェクト「第１回 ポピュラー・カルチャーシンポジウム『パクリ：ポピュラー・カルチャーにおける模倣と流用』」、2010 年 4 月 24 日、京都精華大学（京都市）

〔図書〕（計　1 件）

①増田聡（五十嵐太郎監修）、LIXIL 出版、3.11/After―記憶と再生へのプロセス（執筆論文表題：三・一一、思索と伝達、経験と社会：「今、音楽になにができるか」とい

う修辞に答える―震災時代の芸術作品)、2012、319 頁（担当分 6 頁、pp.264-269）

〔その他〕

雑誌論文②については下記 URL にて公開中。
http://www.kyoto-seika.ac.jp/researchlab/wp/wp-content/uploads/0012.pdf

６．研究組織
(1)研究代表者
増田　聡（MASUDA Satoshi）
大阪市立大学・大学院文学研究科・准教授
研究者番号：５０３２５３０４

(2)研究分担者
なし

(3)連携研究者
なし